

◆ピロリ菌は大事な常在菌

胃ガンの原因菌として、時の人ならぬ“時の菌”になったのがピロリ菌です。検査で菌が発見されると、1週間にわたり薬を飲み続けて駆除します。それでも駆除できないと、追加して薬を飲むことになります。

わざわざ見つけ出してまで駆除する菌ですから、さぞ悪い菌だろうという印象ですが、**ピロリ菌は全く悪い菌ではなく、胃の常在菌**。50歳を過ぎると、ほとんどの人が持っています。個々人、保有する菌の数こそ違え、このくらいの年齢の人なら全員が持っていると言って過言ではありません。

ちなみに、常在菌とは、**人の体に共生する病原性を示さない微生物**で、ピロリ菌の他にも皮膚や鼻の粘膜の常在菌や腸内細菌など、常在菌は体の要所要所に存在しています。**常在菌が体に安定して存在することで、病原性の微生物の繁殖が抑えられます**。また常在菌が白血球の免疫細胞である**リンパ球を刺激し、免疫力の活性化にも一役買っている**わけです。ただ、体全体の免疫力が**極端に低下した時に**、常在菌が原因菌になって感染症を引き起こします。これが日和見感染です。

いずれにせよ、常在菌のピロリ菌は胃に悪さをする菌ではなく、**胃を守ってくれる菌**です。お腹を守る為に腸内細菌を駆除してはいけないように、**胃を守る為にはピロリ菌も駆除してはいけない**わけです。

一方で、ストレスや無理をして**交感神経が緊張すると顆粒球が増加して胃酸の分泌が減り**、酸に弱いピロリ菌が胃に棲みやすくなって数が増えます。

この増えたピロリ菌に、同じくストレスや無理をして増えた**貪食細胞の顆粒球が反応**します。顆粒球は粘膜の常在菌に集まる性質があるので、胃の粘膜に顆粒球が大挙して押し寄せるわけです。その結果、**活性酸素が増え、組織破壊が起こって胃が荒れ放題**になります。それで胃潰瘍になり、さらにはそこから胃ガンへとつながります（ここが重要なことで、ピロリ菌が直接、胃潰瘍を起こしているわけではありません。**持続的な交感神経の緊張に根本的な原因がある**のです）。

◆ピロリ菌を駆除する薬で免疫力が落ちる

ピロリ菌駆除のために飲む**抗生物質と胃酸を抑える薬**が、どんでもない結果を招きます。

抗生物質を服用するとピロリ菌のみならず、常在菌である腸内細菌も破壊されて減ります。**全身の常在菌が減ったことで免疫細胞であるリンパ球への刺激が少なくなって、全身の免疫力が下がります**。さらに、抗生物質を飲み続けることで免疫力が低下すると、**食道炎、潰瘍性大腸炎、クローン病、過敏性腸症候群などの消化管の病気**が発生しやすくなります。

本来、抗生物質で叩く必要があるのは、肺炎、腎炎、膀胱炎、外傷性の化膿を起こしている時だけです。それ以外は、ピロリ菌の除菌であれ、いつもの風邪であれ、抗生物質を飲む必要はありません。胃潰瘍の人が抗生物質を飲み続けると顆粒球の反応が収まりますので、胃の状態はよくなります。もちろん、ピロリ菌が減ったから胃の状態が良くなったのではなく、前述したように、**顆粒球が反応する相手をなくして**胃の状態が**一時的**によくなったのです（顆粒球が増える根本原因は解決されていないので“一時的”）。

もう一つの、胃酸の分泌を抑える薬を飲むと、酸に弱いピロリ菌の数を**逆に増やすこと**になります。そこにストレスで増えた顆粒球が反応して、**むしろ胃潰瘍が起きやすい環境が作られていく**わけです。これでは、病気の芽を摘み取るつもりが**新たに種を蒔いている**ようなものです。

さらに残念なことには、検査で見つかったピロリ菌を薬で駆除しても、**時間がたてば胃には新たなピロリ菌が出現**します。見つかるたびに駆除をしなければなりません。これでは一生、駆除を繰り返すことになり、見つかるたびに確実に免疫力が落ちます。

◆まとめ

